シンポジウム 非特異性脳脊髄炎症

特別発言 釧路地方の症例について

釧路市立病院 伊 東 弓 多 果

釧路労災病院 加 藤 莊 一

釧路赤十字病院 北 川 吉 春

SYMPOSIUM ON NON SPECIFIC ENCEPHALOMYELITIS CASES IN KUSHIRO AREA

Kushiro Municipal Hospital Yutaka ITO, M.D.

Kushiro Rosai Hospital Soichi KATO, M.D.

Kushiro Red-cross Hospital Yoshiharu KITAGAWA, M.D.

釧路地方に腹部症状を前駆として起こる神経疾患が多発したのは昭和36年以後である。われわれは38年、多数の人の協力を得て釧路市全体の患者をほぼ完全に調査し診断し得た。又それ以後の経過の観察もなし得たのでその症例について二、三述べる。

1) 病型について： 現在迄に釧路地方に発病した本シンポジウムに関係すると思われる例は50例で、その内胃腸障害を前駆とした例は44例である。以下その44例について述べる。病型は脊髄障害が主で、いわゆる横断性脊髄炎様の症状を主とする脊髄炎型35例、横断性脊髄障害の症状が非常に強く、又発病後間もなく高度の視束障害があり、従来視束脊髄炎といわれている病像に近い視束脊髄炎型6例、更に腸症状と共に急性増悪緩解を繰り返し眼底変化や眼振その他病巣の多発性を思わせる多発性硬化症様型3例である。しかしこの仮の分類は互いに移行型があり、明確な分類は困難である。

2) 患者発生の状態： 昭和36年に発病した例は視束脊髄炎型4例を含む13例で37年、38年の発病例に比し重症例が多かった。釧路地方例の特徴と思われる点の一つは視束症状を有する患者の多い事であると考えられるが、昭和36年発病例は視束脊髄炎型及び経過中徐々に眼底に乳頭耳側蒼

白、視神経萎縮等の所見を呈する脊髄炎型が可成りあつた。又季節的には5月から10月の間に44例中37例が発病しており、特に視束脊髄炎型は初秋の10月に6例中5例が発病している。男女比は16:28で女性に多く、殊に重症例は女性に多い。年齢は17才から74才で特に好発年齢は見出せない。胃腸症状の発病した場所は釧路市の高台といわれている所に多い傾向がある。この高台部の人口は約3万で全市の1/6であるに比し、患者は44例中25例と過半を占めている。次に神経症状の発現した場所は病院が多く、特に高台に存在する市立病院において25例、他の病院で3例、他は自宅において神経症状が出ている。これは胃腸症状が激しく入院し、間もなく神経症状が出現した例が多い為と考えられる。

3) 前駆する胃腸症状について： 発病前健康であり、急性に胃腸症状が出現。次いで神経症状の現われた例は20例である。発病以前から慢性胃腸炎、胃潰瘍という様な慢性胃腸疾患があり、次いで神経症状を来した例は24例である。しかし慢性胃腸障害のあつた例の内13例は神経症状発現の前に急性増悪症状を呈した例が13例ある。下痢を伴う例と伴わない例の比は18:26で下痢を伴わない例が多い。しかし胃腸症状の状態、即ち下痢があるかどうか、又慢性胃腸症状があつた

かどうかという様な症状と、次いで起きてくる神経症状の軽重や型とは特別の関係は見出せない。即ちわれわれの症例では神経症状の発現を予想させる様な一定の胃腸症状は見出せなかった。腹部症状発現から神経症状発現迄の日数は、10日以内の例が7例あつたが大体10日以上で20日以上例が19例約半数あつた（慢性胃腸障害例で急性増悪のあつた例は急性増悪の日から数えて）。次に経過中に腹部症状の再発と共に神経症状が増悪する例が10例あり、その際新しい病巣を思わせ又緩解を繰り返す、丁度多発性硬化症を思わせる例3例と共に、同じ病巣の増悪を思わせる再発性脊髄炎型7例であつた。

4) 病像について：すべての例に上行性知覚障害があり、大体節性を示していた。上界はTh 10~11が多く20例、5例はTh 7~9迄上つていた。又Th₁₂~L₁に止つた例も多く19例あつた。運動麻痺は軽重の差はあつても知覚障害と相前後して下肢の麻痺が出現した。深部反射は病初消失するものが多く、深部反射亢進を示した例は6例であつた。その後の経過では深部反射の亢進を示すものが多いが、10例は、PSRのみ亢進し、

ASRは陰性となつている。このASRの陰性なのは末梢神経障害を思わせる。病的反射は11例に、クロームスは9例に出ている。病初検査し得た32例の脊髄液所見では、2例の軽度の蛋白増量のあつた他は異常所見は見出されず、金ゾール反応も陰性であつた。

5) 予後と治療について：ステロイド療法は早期に行なうと可成り有効の様に考えられる。予後は3年以上の経過を見ている例は少ないが全例軽快しており、通常の生活を送っている。只36年から37年発病した重症例には、未だ入院治療中で家庭生活に戻れない例がある。

6) 昭和36年発病した視束脊髄炎型の1例：腹痛が起こり間もなく強い鼓腸が起こり、自宅で治療を受けていた。腹痛出現後約1カ月を経てから下肢のしびれ感を訴え、同時に麻痺が出現約20日間で歩行不能となり、更に10日後即ち神経症状発現から約1カ月後に突然視力障害が出現し1週間後にはほとんど盲の状態となつた。この状態が約1カ月続き、その後、やや回復したが、現在でも床上の起座が辛じて出来る程度で、視力は眼前の物の形がわかる程度である。